traveler-旅人-

二羽鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｒａｖｅｌｅｒ－旅人－

【Ｎコード】
Ｎ４１６１Ｉ

【作者名】
二羽鳥

【あらすじ】
世の中は広く計り知れない。
地図も無いその時代。
一人の少女が旅をしていた。
世界のあんみつを食べるため、失踪した姉を探すため。
少女　キュル＝ノルエは世界を駆け回る！！

壱話　弱肉強食の国　前編

さよなら・・・キュル
どうか泣かないで・・・
私の時計をあげるから。
また会えるシルシを

あげるから

ｔｒａｖｅｌｅｒ～旅人～

城門の前で一人の少女が立っていた。
「ここき？弱肉強食の国ルーノは」
少女はため息をついた。

―本当は来たくなかったき―

彼女にはこの国に来た理由があった。
それはある朝の事。彼女は三十代後半でスキンヘッドの男に会った。
男は彼女に手合わせを頼み、その時ふと思い出したように呟いた。
「お前、ルーノに行ったことあっか？」
「いいや、ないき。あそこはいいうわさ聞かないから行きたくないき」
「へぇ、勿体ねえなあ。お前さん強いからやりたいほうだいだぜ？」
「別に興味ないき」
「好きな物も食べ放題だぞ？」
彼女は反応した。

そして話を聞きとうとう・・・

「来てしまったき・・・小生は小生は・・・あんみつが食べたい！！」

世の中は広く計り知れない
地図も無いその時代
一人の少女が旅をしていた。
世界のあんみつが食べたいと
その少女の名は

キュル＝ノルエ

「さぁてこの国には、どんなあんみつが眠ってんのカナー？」

同時刻ルーノの国・ルーノ城にて

王座に座る男・・・ルーノの王は、いらただしげに叫んだ。
「ロップ！ロップ！！」
「ハイ！！何でしょうか。」
ロップと呼ばれた少年は、静かに王座に寄った。
眼鏡にそばかす・・・どうやらけしていい育ちではないようだった。
「また、旅の者が入国しようとしているらしい。国に入ったらすぐ殺れ。」
「・・・しかし、門番が止めるでしょう？」
「ロップ油断をしてはならん」
「・・・はい」

「門番サン入国許可がとりたいんだけど」
「だめだ」
「へ？」
「ここは弱肉強食の国。戦って我に勝ったら勝手に入国するがいい」
キュルは少し悩むと。
「わかったき！！」
そう言った。その瞬間・・・
どさっ
門番は倒れた。
キュルの手には少し濡れた短剣があった。
「弱いき。もっと強くなってから門番やらんと。じゃなけん死ぬき」
返事は返ってこなかった。
「・・・ああ、もう死んでっか。そのきったねぇ血、天使様に洗ってもらえばいいき」
キュルが入ると国の者は一斉に彼女を見た。
居心地悪そうにしていると、国の者は言った。
「私と勝負して下さい！！」
ここは弱肉強食の国
強き者こそ美しい

「めんどくさいき」
キュルは耐えられず、あるお店に逃げ込んだ。
「戦いは好きだけど・・・４３回は多すぎるき。殺しちゃ駄目っつーのもやりにくいき・・・」
キュルがそう呟くと、店の従業員。ルト＝オルガナは言った。

「あら、何言ってるんですか？まだまだいるんですよ？」
「・・・はぁ、あんみつも文化が無いから作れんしさんざんき！！」
「まぁまぁ」
「そういえば・・・ルトは戦わないき？ここの人戦ってばっかだったき」
すると、ルトは微笑んだ。
「ここの人が戦う理由、それは権力がほしいからなのよ・・・王になりたいから戦い続ける。王は人々を好きにできるから。」
「・・・」
「ここでは強き者が王になる。王になりたくない人は国から出る。私も王になりたくないけど・・・」
そこまで話すととても嬉しそうに笑った。
誰がどう見ても愛しい人を思い出した様な満面の笑みだった。
「どんな男き？」
「へっ？」
キュル様ぁ！！
いざ、勝負！！
後少しでルトの恋バナが聞けたのに・・・
キュルは機嫌を最悪にしながら、
「追っ手が来たみたいだから、おさらばき。匿ってくれてありがとう」
と言った。するとルトは丁寧に、裏口を教えてくれた。
キュルはもう一度礼を言うと走って行った。

しばらく走っていると、目の前に突如少年が現れた。
「あんさん・・・誰き？」
「・・・国から出て行って下さい。じゃないと・・・」
「誰だかわからん奴の命令は聞かんき」
「なら・・・死ねぇぇぇ！！！」

少年はいきなりキュルに剣を向けた。しかし
「耳悪いんき？もう一度言う。命令は聞かん。」
キュルはそれを一瞬で抑えた。少年は唖然としていた。
―あの目イヤな目小生の嫌いな目殺すのを・・・
躊躇う目
「誰に命令された？」
「・・・っ！！」
「答えな！！」
「・・・王・・・」
「何を餌に？」
「殺さないと僕が殺される。僕は生きて・・・」
そう言うと少年は真っ直ぐ前を見て続けた。
「やりたい事がある」
―あぁその目小生の大好きな目
「詳しく教えるきそのやりたい事を」
「はぁ、実は」
少年・・・ロップはキュルに耳打ちした。
「こ・・・告白ぅ～！？という事はなんだ？小生はその告白のせいで殺される所か！？」
「すいません！！」
―恋色沙汰多いのう・・・
「どんな子き？」
「天使のように優しい子です！王に用があるのか、時々城に来ています。」
「ふぅん。そうき？それじゃ」
「待ったァァ！！」
「・・・なんき？あんさん・・・ものすごく怖いき」
必死の形相だったロップは、とても怖かったらしい。キュルは汗を流していた。
「旅人、キュル＝ノルエを殺せなかったと知れたら僕の命はありま

せん・・・ですから！！」
「？」
「これはお願いです。キュルさん。死んだ振りをして下さい！」
「は？」

ロップの部屋
「野宿のほうがいくらかましき」
キュルがそう言うのも無理は無かった。どう見ても何処かの牢獄だったからだ。
「言わないで下さいよ」
ロップは切なそうに言い返すと、キュルに聞いた。
「・・・キュルさんはなぜ此処までして、この国に居たがるんです？」
「興味があるから」
「・・・それだけですか？僕にはもっと違う理由があるように見えます」
「無いよ」
即答した彼女の目は何処か寂しそうだった。
「・・・？じゃあ僕は王の所に行ってきます」
ロップが出て行った後、キュルは呟いた。
「やれやれ子供（ガキ）は勘が良くて困るき」

壱話　弱肉強食の国　前編（後書き）

はじめまして。二羽鳥です。
この物語が初投稿になるので不安もありますが、
ｔｒａｖｅｌｅｒ－旅人－をよろしくお願いします！

弱肉強食の国　中編

「は？」
「だから次はコイツを殺せ」
「いやしかし・・・何故です・・・？」
「求婚を断ったからだ」
「な・・・」
”この国は腐ってる”
・・・その通りかもしれませんキュルさん

「キュルさん、貴女は恋をしたこと無いんですか？」
ロップがそう言ったのは、自分が告白の為にキュルを殺そうとした後すぐである。
「いきなりなんき？」
「貴女は自分の手を汚してでも守りたい物ないんですか？」
「・・・ないき。大体汚さないと守れないんき？」
「それは・・・「この国は変わってるき。皆権力を求めて戦うのにどうして楽しそうなんき？」
「楽しそう・・・？」
「皆笑って殺しあう。仕方なく・・・？ちがうだろう。この国は腐ってる」
「・・・」
「奇麗事は言えないき。只、皆権力だけで大切なものを失う。それを忘れ、権力者になると喪失感に襲われる。そして我が儘になる」
「喪失感・・・」
「お前も忘れんな。自分が何のために戦っているかを」

「・・・ハイ」

知っていた。そんなことは。
分かっていた。言われなくても。
でも・・・
見ないふりをしていた。

「もう見ないふりも出来ないかな・・・」
ロップは悲しそうに笑った・・・
「さぁ、殺せルトを。ルト・オルガナを」
王から渡された剣は鈍く光った。
「それでも僕は・・・」
見ないふりをし続ける。
切っ先を静かに己の喉へ・・・。
「バーカ」
キンッ・・・。
「!?・・・!き・・・キュルさん?」
キュルの足は剣を弾いた。
「誰だ!!」
「・・・只のしがない旅人だよ」
「た・・・旅人だと?まさか・・・ロップお前」
「・・・」
「お前!!」
「あららぁ・・・お叱りは後にしてよ。自分が上でありたいが為に沢山の旅人を殺させてきた国王さんよ」
「何が言いたい」
「んー二つ言いたいなぁ」
「キュルさん?」
「まず一つ、なぜ入国させる」

「は？」
「そこまで旅人が脅威なら入国させなきゃいいんじゃないき？」
「・・・くくっ・・・そうだな冥土の土産に教えてやろう。此処にくる旅人は大半がこのシステムを知っている。」
「？」
「そのまま返せば外から俺をつぶそうとするんだ。しかしだ、奴らは馬鹿なもんで国に入れると油断するんじゃよ」
「その隙に・・・か」
「そう言うことさ。」
「はっ・・・そりゃ此処に来るのはルーキーばかりだからできるんき」
「そうだな。確かにそうだ。なら貴様は何故此処にいる。ルーキーなんかじゃないじゃろ？」
「あんみつのためき。後もう一つ」
「？なんだ」
「‘ロイス’を知ってるき？」
「ロイス？」
「ロイスってあの！？」
「・・・答えるき」
「キュルさん！？貴女はなにを」

貴女は今自分が言ってること分かっていますか？
そう言おうと思って止めた。
この人は本気なんだ。
少し前彼女が言ったあの言葉。
あの時僕は　目だけで何が分かるのか　そう感じた。
でも今分かったんだ。

『殺すのを戸惑う目』

全てが分かるよ

だってキュルさん。今の貴女の目は

「死ぬ前の戦士の目」

がむしゃらに・・・突き進む。

「ロイス・・・あの忌々しい冒険家ロイス・カラナーか？」

「そうき」

ザワッ・・・

「・・・大冒険家ロイス。あるところでは英雄あるところでは異端者。なぜ・・・」

「なぜ、かぁ・・・知っているね。噂なんかじゃなく」

「なぜあやつの名が・・・」

「問いに答えろ！！！」

「・・・くっ・・・はっはっはっ！！」

「・・・っち　教える気はねぇって？死ぬき？」

「死ぬ？どの口が言う？此処はわしの城じゃぞ？」

「お前の兵士と違って小生には実力があるんき」

「キュルさん！！無理です！この城には実力者ばかりがいます！」

「・・・何故？」

「そんなきょとんと言わないでください！」

「だから・・・小生もお前もそいつらと同じ・・・じゃなくて、それ以上の実力者き」

「え？ちょ！！僕もですか！？」

「？当たり前き。もともとそのつもりだったき。後ルトも連れてく」

「！！」

「ルトの事好きなんき？だったら告白するまで死んだら困るき！」

「・・・はい」

「捕らえろ！！侵入者だぁぁぁ！！」
「さぁ・・・やってみろ」
「気迫十分だぁ」
「感心してる場合じゃないです！！！」
「さてと」
ドンッ！！！
「かはっ・・・！！」
「え？」
キュルさんがまるで舞う様に兵士に蹴りをいれた。
「すご・・・あれ？キュルさん？ちょ・・・何してるんですか！？」
キュルさんは倒した兵士の持ち物を漁っている・・・旅人としての本能かな？
「この剣いいな」
「なにを？」
「小生剣持ってないから」
「はぁ・・・貰うんですか・・・」
「うん。んーじゃ・・・」
キュルさんは消えた。
次現れたのは・・・
「この王を殺せば終わり」
王の真後ろだった。
キュルさんの手の剣が王の傍にある。
「な・・・わしを守れ！！兵士！！」
「っ・・・ルト・オルガナがどうなってもいいのか！？」
「低レベル・・・ロップ。決断しろ」
「へ・・・はい！」
「んじゃ」
「お・・・おい」
ザシュ
「・・・おいおい仮にも、弱肉強食の国の王だろ？」

「ルトを処罰する！！」
「させない」
ザシュ

そう・・・簡単だった。
逆らうことも　逃げることも　戦うことも
何処かで諦めていなきゃ。

かんたんだった

やらなかっただけだった

自分に溺れた兵士を　斬るのは　とても　かんたん
ザシュ・・・人を斬る音。
響く声。
そうだ僕は既に、沢山の人を斬ったじゃないか。
今更何を迷う？
「嫌・・・」
君に嫌われるのが嫌で隠していた事実。
僕が人殺しをし続けたこと。
「何故・・・」
「只守りたかったんき」
「え・・・」
「ルト。あんたを守り続けた男き」
「守り・・・」
「影で支え続けた。そのために自分の手を汚した男き。馬鹿な野郎だけど、あんたのため。それだけははっきりしてるき」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4161i/

traveler-旅人-

2010年10月9日03時09分発行